

二〇二三年度
晃華学園中学校

第二回
入学試験問題

【国語】

時間…四〇分
配点…八〇点

答えはすべて解答用紙に記入すること。

問題は次のページから始まります。

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

――頭が、痛い。

こめかみをぎゅうつと誰かに押さえつけられているような痛みが朝から取れない。そのせいで、食欲がなく、目の前にあるお弁当に箸がつけられないでいた。

「大丈夫？ 保健室で痛み止めの薬もらってきたら？」

眉間にシワを寄せてお箸を持ったたり置いたりを繰り返している私に、和ちゃんが言った。

「そう、しようかな」

これまではこんなふうに頭が痛くなることなんてなかったのに、ここ最近は頻繁に頭痛に襲われる。今日はとくにひどい。低気圧だとしんどくなる、と前に美緒ちゃんが言っていたつけ。まあ、今日は雲ひとつない青空が広がっているから、関係ないのだけれど。

頭痛の原因は、おそらく寝不足だ。

最近寝付きが悪いうえに、熟睡できずに夜中に何度も目が覚める。

寝る前に文乃ちゃんのことを考えているからだろうか。

はじめは小さなシミのようなものだったのに、それはいつの間にかどんどん私の体の中を黒色に塗りつぶしていく。体が、頭が、重い。

① ちらりと目の前にいる文乃ちゃんとかえちゃんを見ると、楽しそうに笑っていた。

ふうーっと息を吐き出して立ち上がる。

「ひとりで大丈夫？」

② 「うん、ありがとう」

付き添ってくれようとした美緒ちゃんの言葉を断り、ゆっくりドアに向かって歩く。

頭が痛いのは困ったけれど、昼休み中、みんなと話をしないですむのはありがたい。体調が悪ければ無言でもいいし、愛想笑いもしなくていいのは、楽だ。

――ひとりで過ごしていたときのよう。

そんなことを考えてしまう自分がいやだ。心配をしてくれた美緒ちゃんたちの気持ちを踏みにじっているような気がして、後ろめた
い。

とにかく、今日の昼休みは保健室で時間を潰そう、と教室のドアに手をかけた、そのとき。

「え！ 文乃、今日の小テスト0点だったの？」

かえちゃんの大きな声が教室に響いた。

教室内がざわめく。

「小テストって、今日の国語のやつ？ マジで？」

「めっちゃ簡単だったよな」

クラスの男子も文乃ちゃんに聞こえるような音量で話しはじめる。

「ち、ちよつとかえちゃん、見ないでよー」

振り返ると、かえちゃんの手に使っていた答案用紙を文乃ちゃんが必死になって取り返そうとしていた。

「頑なに点数言わないからどうしたのかと思ったら、そういうことかあ」

「隠したいならちゃんと落とさないようにしないとダメだよねえ」

美緒ちゃんが呆れたように言って、かえちゃんは文乃ちゃんの手を躲して答案用紙を見つめている。

「でも0点って。逆にすくない？」

「回答欄を間違えちゃったんだよねえ。もう、恥ずかしいからやめてー」

「えー、本当にー？」

「本当だって。ね、もういいでしょー、やめようよー」

かえちゃんは楽しげに笑っていた。文乃ちゃんも笑みを浮かべている、けれど。

その様子を見た男子が「すげえな」「漫画みたいなミスしてんじゃん」とゲラゲラ笑う。他の女子たちは会話にまぎることはない

ものの、嘲笑うような表情を浮かべて文乃ちゃんを見ていた。

なんでかえちゃんは、みんなに聞こえるように文乃ちゃんの点数を言ったんだろう。文乃ちゃんが隠していたのは、誰にも知られな
くなかったからだ。友だちなら、いや、友だちでなくなつて想像がつくことなのに。

バカにするためにわざとやったとしか、思えない。

体がざわりと震える。

「減多にこんなのないから、自慢できるよ文乃」

「あはは、そうかなあ。自慢になるかなあ」

文乃ちゃんが自虐的に声を上げた。自らの意思でみんなの注意を惹くかのように言う、まわりはさつきよりも騒がしくなる。

「ほんと文乃はどんくさいっていうか抜けてるっていうか」

「まあ、たしかに今どきそんなことで0点取るなんてすごいよ」

「美緒ちゃんにすごいって言われるってことは褒められてるの？」

「そんなわけではないしょー、文乃、調子のりすぎ」

③ 自ら笑い話にしている文乃ちゃんの表情は、一見楽しそうに見える。けれど、顔は真っ赤で、頬が引きつっている。

それは、どう見ても無理をしている、表情だ。

頭痛がひどくなる。どくんどくと、こめかみが脈打っている感じがする。痛い、重い、揺れる。振動で、鼓動もはやくなる。

④ ドアに手をかけたまま、廊下に足を踏み出すことができず、教室の様子を眺める。

教室に入ろうとした誰かが正面にやってきた気配がした。顔はずっと教室の中に向けられているので、誰かはわからない。はやくどいてあげないといけないのに、動けない。

「なあなあ、その答案用紙おれにも見せてよ、写真撮りたい！」とひとりの男子が文乃ちゃんに近づいた。

「え、や、やだよ」と文乃ちゃんは当然断り、かえちゃんが「いいじゃん減るものじゃないし」と文乃ちゃんの肩に手をのせる。

「でも、字も、汚いし恥ずかしいよー」

明るく拒否する文乃ちゃんに、今度は「たしかに文乃の字はクセがすごいよね」と美緒ちゃんが言った。「クセって言うか、雑だよね！」
きやはは、とかえちゃんが笑ったからか、男子たちは余計に興味をそそられたらしく「見てえ」と文乃ちゃんに詰め寄る。

「文乃の字、ほんと、たまに読めないの、雑で」

「この前テストでも『解読不可』って先生に赤字入れられてたよね」

「ふはは、やべえなそれ」

「次の中間までに字の勉強しないとね」

会話がどんどん進んでいく。

今までの失敗をひとつひとつネタにして、そこから別の失敗を嘲る。^{あざけ}

仕方ないなあと文乃ちゃんは気持ち切り替えるためか食事を再開しようとした。けれどタイミング悪く、文乃ちゃんはその場で箸を逆さに持ち、指摘されたことでそれを落とす。

教室が高笑いに包まれる。

文乃ちゃんは徐々に言葉数を減らし、ただ、笑っているだけになっていた。

⑤ 笑顔のあふれる教室が、気持ちが悪い。

「なんで、笑ってるの」

気がついたら、口が動いていた。

その一瞬で、教室の空気が一掃されたかのように静かになった。

私の声はけっして大きくなかったはずなのに、隅々まで聞こえてしまったのか、クラスメイトの視線が私に集中する。

「どうしたの、凜子」

⑥ 片眉を上げてかえちゃんが噴き出す。けれど、その言葉にはどこかトゲが含まれているように感じた。

鋭い視線から咄嗟に目をそらす。

「あ、いや……」

独り言のつもりだった。

思ってもみななかったクラス中の反応に、たじろぎつつ、ぐっと足を踏ん張る。すると、今度は眉間のあたりが痛んだ。

ああ、頭が痛い。イライラする。

でも、このいらだちは頭痛によるものだけではない。

「そんなに、からかわなくてもいいんじゃないかな、って」

拳を作り、かえちゃんに言葉を返す。かえちゃんは目をくりつと大きく見開いてから「大丈夫だし」と言って文乃ちゃんのほうを見た。

「ちよつといじつてるだけじゃん。ねえ、文乃」

「あ、うん、はは」

ななが大丈夫なのか。

安易に頷く文乃ちゃんにもイライラする。

なんで笑っているのかさっぱりわからない。さつきまで、明らかにつらそうな、居心地の悪そうな顔をしていたじゃない。ふたりの仲が悪いわけじゃないのは知っている。

私だって、文乃ちゃんのこと、かえちゃんのこと、きらいなわけじゃない。

でも本当に、さつきの会話は、空気は、間違っていないのだろうか。

なにもおかしくないことじゃないと、みんなは思っているのだろうか。

私だけが気にしているのだろうか。

「凜子、ちよつと気にしすぎなんじゃない？ ノリ悪いよお」

かえちゃんが、呟いた。

私に聞かせるつもりはなかっただろうと思うくらい小さな声だったけれど、それでも、しっかりと私の耳に届く。

⑦ ぐつと唇に歯を立てて、体ごとかえちゃんのほうに向けた。

「でも、――」

「おいおい、いじりの回数は三回までって言っただろー」

私のうしろから明るい声が聞こえてきて、一気に視線がそちらに集まる。

「……和久井くん」

振り仰ぐと、和久井くんと、阪城くんと多久くんが立っていた。いつから私の背後にいたのか。と思ったところでそういえば誰かが近づいてきた気配を感じていたことを思い出す。

彼は名前を口にした私をちらつと見てから、誰にもバレないように背中にとつと触れてきた。

もう大丈夫、とでも言うように。

「いじりが長い長い、お前らまだまだ未熟者だわ。そんなんじゃない不合格って感じ？」

「ぶはは、なんだそれ。なんの試験だよ」

和久井くんは、さっき文乃ちゃんの答案用紙を取り上げようとしていた男子に「そんなんだからだめなんだよ」とにやりと笑いなから指差して、自分の席に向かっていく。いつも和久井くんという男子ふたりも「センスがねえよな」と同じようにクラスメイトにダメ出ししていた。

けれど、けつして場の空気を重くさせるような、真剣な口調ではなかった。
じょうだん冗談と本気の、ちょうど中間、という感じだ。

だからなのか、誰ももう、文乃ちゃんを笑うひとはいなかった。

そして、和久井くんは文乃ちゃんの答案用紙を見て、

「オレの字のほうきたねが汚えな。オレに敵かなうわけないっつーの。なあ？」
と阪城くんたちに同意を求める。

「なんのマウントだよ。傲慢になんねえだろ」

「なんでも一番は誇ほこれるんだよ」

大声でじゃれ合う和久井くんたちに、かえちゃんも美緒ちゃんも「くだらないことでケンカしてー」と表情をやわらげる。

⑧ 教室の空気は、一気に和久井くんのものになった。

和久井くんの笑顔に、頭痛が少しだけ引いた気がした。

(櫻いいよ『世界は「」で沈んでいく』)

問一 —— 線部①「ちらりと」と同じ性質を持つ言葉は、後のア～エの —— 線部のどれですか。最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雷かみなりがごろごろと鳴っていた。

イ 会場かいじやうががやがやと騒がしい。

ウ 私たちは街をぶらぶらと歩いた。

エ 肉がじゅうじゅうと焼ける。

問二——線部②「うん、ありがとう」とありますが、「私」はこのとき、どのようなことを思っていたと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア すぐに頭痛を治したいから、美緒ちゃんにお礼を言って早く教室を離れよう

イ 美緒ちゃんが体調を心配してくれるのはうれしいけれど、今は一人にしてほしい

ウ 本当は付き添ってほしいけれど、保健室まで行くと昼休みがなくなるから、美緒ちゃんに悪い

エ 美緒ちゃんとは最近仲が良くなかったから、保健室まで二人っきりで行くのは気まずい

問三——線部③「自らくしている」とありますが、このときの「文乃」の様子の説明として最も適当なものはどれですか。次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア テストで0点をとったことを早く忘れて、気を取り直して次のテストのために努力しようとしている

イ クラスメイトが同情してくれて申し訳ないので、この場の雰囲気（ふんいき）をなごませようとしている

ウ 無理して明るくふるまうことで、つらい気持ちをクラスメイトにさとられないようにしている

エ 0点をとった恥ずかしさを隠して失敗談として紹介（しょうかい）することで、クラスの注目を集めようとしている

問四——線部④「ドアにく眺める」とありますが、このときの「私」の様子の説明として最も適当なものはどれですか。次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスメイトにからかわれている文乃がいつ怒（おこ）り出すか分からず、はらはらしながら様子を見ている

イ 先生に告げ口をしに行くとクラスメイトに思われるかもしれないので、教室から出られないでいる

ウ 体調がひどくなってきた保健室に一人で行けそうもないので、誰かに助けを求めようとしている

エ 文乃へのからかいも、それに対する文乃の対応も納得（みづから）いかないが、何をすればいいかわからないでいる

問五——線部⑤「笑顔のゝ悪い」に関する説明として最も適当と考えられるものはどれですか。次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア ここでの「笑顔」は、喜びや楽しさからくる一般的な笑顔とは異なるものを表している

イ 「あふれる」という言葉は、笑い声が教室の外まで鳴りひびくほど大きいことを表している

ウ ここでの「教室」は、普段（ふだん）の明るいクラスの雰囲気（ひふい）を、比喻（ひゆ）を用いて表した言葉である

エ 「気持ちが悪い」は、「私」の体調が悪化していることを強調している表現である

問六 —— 線部⑥「片眉を上げて」とありますが、これは「かえちゃん」のどのような気持ちを表していますか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分の行動を非難するように聞こえる「私」の言葉にいら立つ気持ち

イ 体調の悪い「私」が保健室に行かないでいることを責める気持ち

ウ クラスメイトと一緒に笑っていない「私」のことを不思議に思う気持ち

エ 教室が笑いに包まれている理由がわかっていない「私」に驚く気持ち

問七 —— 線部⑦「ぐっとう向けた」とありますが、この動作には「私」のどのような意志が込められていますか。「意志。」に続く形でわかりやすく答えなさい。ただし、「」の部分は五十字以内とします。

問八 —— 線部⑧「教室のゝなった」とありますが、これはどのようなことを言おうとしているのですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 和久井くんが、荒れて^あいるクラスを立て直すことに成功したこと

イ 和久井くんが、クラスメイトの関心を「私」や文乃からそらしたこと

ウ 和久井くんが、自分こそがクラスのまとめ役であると認めさせたこと

エ 和久井くんが、冗談の言い合いを通して笑いをクラスにもたらししたこと

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。ただし文中の図は省略してあります。

共感の生まれるところに発見がある

「共感する」ということは、家庭や学校で特に教わってくるわけではないときにも書きました。でもいつの頃^{ころ}からか、多くの人がそうした感情を持つようになりますし、誰か^{だれ}の状況^{じょうきょう}に涙^{なみだ}を流したり、怒^{おこ}ったりできるようになってきます。不思議ですね。人間が赤ちゃんから大人へと発達してくる中で、共感はいっ現れてくるのでしょうか。その糸口になるのが、米国の認知^{にんち}心理学者のマイケル・トマセロの研究です。トマセロは認知心理学の中でも、霊長^{れいちやう}類学、発達心理学を専門としています。

生後九カ月以降の赤ちゃんには、「共同注意」(joint attention)と呼ばれる行動が出現することがわかっています。共同注意とは、そばにいる誰かがあるものを見ると、それを見るようになるということです。え、なんでそれが不思議なの？と思う読者もいるでしょう。でもこれ、すごいことなんです。⁽¹⁾それはなぜでしょうか。

赤ちゃんは最初の頃は、ミルクをくれる人など、世話をしてくれる人だけを見ています。ところが九カ月を過ぎる頃になると、その人が自分以外の何かを見ていると、「何を見ているのかなあ」と不思議に思っ、その「何か」に目を向けるようになるのです。まだまだ言葉も話せない時期ですが、赤ちゃんはその人の興味を、心を知ろうとしているということです(図4・1)。

共同注意に注目した人間の発達の研究は複数ありますが、中でもトマセロはこの活動を、他者を理解するということに重きを置いた発達の段階としてとらえています。

生後三カ月頃に、Iがあり、それが生後九カ月頃になると、他者が目的を持つているものとして理解し、目標や知覚を共有し、IIに変わってきます。そして、生後一四カ月頃からは、他者は意図を持つているものとして理解し、意図や注意を共有し、

IIIに発達してくるとしています。

この過程で、他者が必要としていることに気づき、それがさらに、人のため、社会のために⁽²⁾無私の心で行う行為が出てくるとしています。何らかの共通課題達成のために他者と協力するという活動をするようになってくるのです。これが興味深いのは、注意と意図の共有は、人間の進化の過程においても、個人の一生においても、言語の獲得、すなわち言葉を話すようになる前に起こってくることです。このことからトマセロは、意図共有が人間社会における文化の進化をもたらす推進力となったと主張しています。

他方で知っておきたいのは、こうした発達には、先天的なものも含め個人差があることです。一人ひとり異なるから違いが生じるのです。対人関係をいとも簡単に⁽³⁾円滑に結べる人もいれば、そうでない人もいますし、コミュニケーションが得意な人もいればそうでない人もいます。できないこと、足りないことが悪いものではありません。大切なことは、⁽⁴⁾各々の違いを互いに尊重し、認め合い、足りない部分を互いに理解して、補い合うことです。現在では、社会性(対人関係)やコミュニケーションを行えるよう支援するデジタルツールも開発されてきています。一つ例を紹介しましょう。

UDトークは、コミュニケーション支援のアプリです。人の話し言葉をリアルタイムでテキストに変換し、⁽⁵⁾会話を文字で表示することにより可視化します。私が仲間と毎年実施しているはこだて国際科学祭のイベントで、UDトークを使って登壇者の話した言葉を、その場で字幕として背景に投影したり、参加者の手元のスマホ等の端末に配信しました。そのイベントには、聴覚に障害がある人が参

加し、UDトークの機能を活用して質問をしていました。また、音声聞いて理解をすることを苦手とされている人からは、字幕により内容が理解しやすくなったというコメントをいただきました。

このアプリを使うと、音声から変換されたテキストデータは過去にさかのぼって画面で見ることができるので、登壇者がいくつか質問された際に、何分か前の質問の内容を確認して答えるということもありました。また参加者も、講演内容を確認しながら質問していた場面もありました。これを自動翻訳機能と連動させれば、話すそばからいろいろな言語に翻訳することができます。難聴者など音を聞き取りにくい人がイベントに参加しやすくなることを意識して導入しましたが、他にもいろいろな活用の仕方があることを発見しました。このように、話し言葉を文字化する技術は難聴者のためだけでなく、⁽⁴⁾ コミュニケーションのあり方の可能性を広げることになるのです。

これは話し言葉のコミュニケーション支援の例でしたが、このほかにも画像認識技術を利用して人の表情を読み取り、喜怒哀楽の気分を単純なアイコンでわかりやすく示したり、その反対に、感情を表情に表すことが難しい人に対しては、アイコンで自分の感情を伝えるなどのコミュニケーションを支援するツールも開発されています。

人間の知的活動を支援するツールを開発するためには、人間の認知活動のメカニズムをモデル化する必要があります。このモデルを作っていく過程に、AIの新しい機能開発の重要なヒントを得られる可能性があります。社会性やコミュニケーションを支援するツールの開発は、⁽⁵⁾ AIに「社会性」「共感」といった概念を組み込んでいく際に参考になっていくでしょう。

ケアを共にする社会のAへ

人と人のつながりを意識することで成り立っている職業の多くが感情労働と呼ばれ、それは人間の強みである共感が必要な、いわゆる「ケア」を与える側の仕事でした。感情労働の大変さを軽減するために、AIを活用できる可能性もあります。その可能性を探るため、ケアの概念について考えてみようと思います。

そもそもケアとはどのような概念なのでしょう。ケアをする人 (care-giver)、ケアされる人 (care-receiver) という、子どもや高齢者の世話の風景を思い浮かべるのではないのでしょうか。政治学者のジョアン・トロントとベレニス・フィッシャーは、もう少し広い意味で、ケアを以下のように定義しました。

「もつとも一般的な意味において、ケアは人類的な活動 a species activity であり、わたしたちがこの世界で、できるかぎりより善く生きるために、この世界を維持し、継続させ、そして修復するために、すべての活動を含んでいる。世界とは、わたしたちの身体、わたしたち自身、そして環境のことであり、生命を維持するための複雑な網の目へと、わたしたちが編みこもうとする、あらゆるものを含んでいる。」

(ジヨン・C・トロント著、岡野八代訳・著『ケアするのは誰か?』白澤社)

人間はそもそも社会的な生き物です。一人では生きていけませんし、お互いになんらかの形で依存して生きています。このケアの考え方を前提に世界を見ていくと、いろいろなもの、問題が見えてきます。よりよいケアの活動に向け、トロントらは、「①関心を向ける」と caring about」「②配慮する、caring for」「③ケアを提供する、care-giving」「④ケアを受け取る、care-receiving」の四つの切り口を示しました。

この四つが互いにうまく組み合わせることによって、よりよい社会になると考えました。逆にいずれか一つが欠けても、私たちが暮らす社会に問題が出てくるということです。ケアの対象は人だけでなく、IV も含みます。誰にケアが必要かだけでなく、ここで「誰がケアしていないのか」を考えてみるのも良いでしょう。

トロントらは、誰もがみな生涯を通じてケアに関わっていく、利益を受けるだけ、提供するだけというところから、①から④の次に⑤として「ケアを共にする caring with」ことを提唱します。⁽⁶⁾ ケアを共にする社会においては、社会全体としては歩みは遅くなるかもしれませんが、誰も取りこぼすことなく、互いに支え合いつつ、ゆつくりと進んでいくことができるでしょう。網目状の織物であれば、どこかの糸が切れても、全体としてはつながっている、自分の糸が切れても誰かが補ってくれる、そんな強い社会にしていきたいために新しいテクノロジーやAIの活用方法を考えていくこともできるはずです。

(美馬のゆり『AIの時代を生きる 未来をデザインする創造力と共感力』)

問一 ―― 線部(1)「それはなぜでしょうか」とありますが、この理由として適当ではないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 共同注意という行動は、まだ言葉も話せないような時期から赤ちゃんが他者の心を知ろうとすることだから

イ 人間が言語を獲得したことによって、他者との注意と意図の共有が可能になったのだと証明されたから
ウ 共同注意は、他者と意図を共有することにつながり、社会に文化をもたらし力になったと考えられるから

エ 注意や意図を共有することで、生後一四カ月頃にはすでに他者と協力するという心が生まれていると見られるから

問二 I III に当てはまる最も適当なものを次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 他者と目標物と自分という三者の関係を含んだ三項関係

イ 他者と協力的に関わろうとする段階

ウ 他者の集合である社会と自分という対立関係

エ 他者と一対一で感情や行動を共有する段階

問三 線部(2)「無私」、(3)「円滑」の意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(2) 「無私」
ア 自分の意思をもたない
イ 望みをあきらめる
ウ 自分の利益を求めない
エ 我をわすれる

(3) 「円滑」
ア 誰にも邪魔じゃまされない
イ 何も妨さまたげるものがない
ウ 他に影響あを与えない
エ 物事の進度が速い

問四 線部(4)「コミュニケーションを広げる」とありますが、これにあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 過去の音声_{（下線部）}を文字で再現することで、より正確なコミュニケーションにつながる

イ 違う言語を用いる人同士のコミュニケーションがスムーズに行えるようになる

ウ 会話を表示した文字を拡大することで、目の悪い人もコミュニケーションがしやすくなる

エ 音声による理解を苦手とする人が、コミュニケーションに参加しやすくなる

問五 ―― 線部(5)「AIに組み込んでいく」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人間の認知活動のメカニズムを明らかにし、それを元にした機能をAIに搭載とうざいすることで、社会性や共感を持っているかのようにすること

イ AIを開発する際、人間同士のコミュニケーションを支援するような機能を組み込むことで、AIが社会の中で共感をもって受け入れられるようにすること

ウ AIが人間の表情や言語を分かりやすく翻訳することで、人間の社会性や共感する力を育むための有益なツールとなっていくということ

エ 人間の認知活動のメカニズムをモデル化する機能をもったAIには、その過程で人間と同様の社会性や共感が備わっていくはずであるということ

問六 IV に当てはまると考えられる言葉は何ですか。次のア～エから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 歴史や文化など、目に見えないもの イ 思想や概念と呼ばれているもの

ウ 絶滅危惧種や環境破壊はかいの進む地域の自然 エ 動物、生態系といった環境

問七 ―― 線部(6)「ケアを共にする」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア すべての人に対してケアを行う イ 誰もがケアに関わる

ウ 同時にケアが始まる エ みなが同じケアを受けられる

問八 次のア～オのうち、本文の内容と合っているものにはA、そうでないものにはBと答えなさい。ただし、すべて同じ記号を用いてはいけません。

ア 人間は社会を形成することによって生きられるので、よりよい社会のために必要なケアについて考えなければならない
イ 共感するということは人間特有の感情であるので、共感を必要とする感情労働は今後も人間にしか行うことができない
ウ コミュニケーションが苦手な人も、それを補うデジタルツールなどを活用し、他者を理解することに努める必要がある
エ 人と人がデジタルツールを通じてつながることで、遠くで暮らしている人に対してもよりよいケアを行うことができる
オ ケアを共にする社会では、社会の歩みは遅くなるかもしれないが、一人一人の人間がよりよく生きることの方が重視される

三

次の①～③の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① ヨウサン 農家を継ぐ

② 羊のムレ

③ チャクガン 点がするどい

